神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A tribute to the memory of professor Yamada Masaru

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2004-09-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 御輿, 哲也, Ogoshi, Tetsuya
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/747

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

追悼　山田　勝先生

御　輿　哲　也

今この原稿を書いているのはちょうど8月半ば，遠く旅立たれた方たちのことを，あれこれ想い出さずにはいられない季節――。

最寄りの駅近くの工事現場の塀に沿って，誰が植えたものなのか，数株のヒマワリが大輪の花を咲かせている。どれほど殺風景な場所であろうと，どんな騒音に包まれていようと，そんなことには一切構わず，自分は自分だとでも言うように，エネルギッシュに鮮やかでスケールの大きな花を咲かせ続けるその姿を見るうちに，知らず知らず，山田勝先生の面影を重ねあわせていた。

去る3月2日，山田勝先生は，約2ヶ月間の入院生活の後，食道ガンで亡くなられた。61才だった。ご体調がおもわしくないことは2年ほど前からうかがっていたし，会議の席などで，疲れてうなだれたようなお姿を見かけてはいたものの，やはり「急逝された」という印象を拭い去ることはできない。もっともっとお聞きしておきたいことがあったのに，と残念でならない。

山田先生と私とは十歳ほどしか違わないのだが，その私から見ても先生は，いかにも古き良き時代の，今は数少なくなってしまった文人肌の研究者だったように思える。その業績について「趣味の延長にすぎない」と悪口をたたく向きもあるが，わずか十数年の間に，オスカー・ワイルドや世紀末文化についての十指にあまる著書を，まさに立て続けに発表された情熱に対しては，

誰しも敬服せずにはいられまい。そして社会の通俗性を侮蔑し，美に殉じようとした作家たちを論じられる際の先生の筆遣いは，いかに生き生きと活気に満ち，楽しげに踊っていることか！　間違いなくそこには，余人の容喙をたやすく許さぬ世界が息づいている。

先生が折りにふれておっしゃった言葉で，私の記憶の底に焼きついているものは数多い――「教師が几帳面になりすぎると学生は堕落する。大学はそういう所や」，「建て前は大事やが，建て前が建て前にすぎんことを忘れてる奴が多い」等々。ほかに私個人に向けて言われた印象深い言葉もある。

たとえば同僚になって間もない頃，何かの会議の後で昼食をごちそうになった折，先生はポツリと「御輿さん，もっと粋な生き方をせなあかんで」と言われた。就職したばかりで，たぶん必要以上に生真面目に振舞う私を見かねてのアドバイスだったのだろう。批判の中にも思いやりをこめた先生らしい口調だった。残念ながら，その後も私の野暮天ぶりが治った形跡はなく，先生の宿題を結局提出しそびれたような感じがしている。

もう一つ忘れがたいのは，最後に入院されるひと月ほど前，体調がすぐれないので人事関連の仕事を代わってほしいと依頼に来られた時のこと。いつもの先生のカジュアルな口調とは打って変わって，深々と頭を下げながら「迷惑かけますけど，よろしくお願いします」とおっしゃったのには心底驚いた。丁寧すぎる言葉遣いに面喰ったのも事実だが，それ以上に何か不吉な予感がした。だが先生の心の奥には，きっと単なる「予感」以上のものがあったに違いない。そして一種のけじめとして，そっと別れの挨拶をしようとされたのだと思う。鮮やかな，ほとんど鮮やかすぎるほどの幕の引き方で，こんなところにも先生流のダンディズムの一端を見る思いがする。

思い出は尽きないが，まだ十分冷静に思い出にふけることができずにいる。今はただ心から先生のご冥福をお祈りするばかりである。